

二度の疎開

●天沼三丁目

国谷 和義

(大正三年生まれ)

戦時中わたしの家族は、東京からの疎開を二度も経験した。これには次のようないきさつがある。

一回目は、当時目黒の上大崎に居住していたとき、都の勧告に従って、常磐沿線の岩間に疎開させた。そのころ、長男は四歳、長女は三歳だった。男子は特別の事情のない限り、防空要員として、疎開が禁じられていた。可愛い子供たちや、愛する妻との別居生活は淋しかった。それでも岩間は東京から遠くもないので、週末には努めて家族に会うのを楽しみに出かけたものである。

昭和一九年五月一三日、会いに行った日の夜、長男が自家中毒症のため高熱を出した。翌朝、近くの医者を訪ねると、遠くへ往診に行ったから、夕方まで帰って来ないとのことだ。放置できないと思ったわたしは、日ごろ世話になっている東京の女医さんに電話した。哀れに思われたのか先生は、さっそく来て下さり、夜を徹して手当てをして下さった。しかし、その甲斐もなく、翌朝長男は息を引きとってしまった。

葬儀に必要なお棺を求めて、わたしは葬儀屋へ走った。し

かし子供用のお棺は間に合わないと断られた(当時は井の頭公園の杉木立が切り倒され、緊急用のお棺になっていたくらいだから仕方がない)。止むをえず、茶箱を手に入れ、これをお棺の代わりに使用することにした。このあたりは一般に土葬で、伝染病死者か地方から来た者だけが、火葬をするしきりになっていった。畑の中にある所定の場所で、係の人が酒の勢いをかけて、焼いてくれるのであった。大八車に薪とお棺を積んで曳いて行ったあの光景は、今でも思い出すと涙がこぼれる。長女が「お兄ちゃんを連れて行ってはイヤだ」と駄々をこねたが、現場に着く前に眠ってくれたので、家へ帰らせた。

以上のようなことがあって、わたしたちは直ちに、住み馴れた東京の荻窪へ舞い戻って来た。天沼から白山神社の近くにあるアパートに引越したころ、至近距離に爆弾が落ちて、一家が全滅する事故が起こった。そのころ、家内は妊娠しており、既に予定日が過ぎていた。産婆さんの勧めで、名古屋の生家へ帰ってお産をすることにした。当時は旅行が制限さ

れており、切符を買うのが容易でなかった。一二月の寒空に、わたしは切符を買うため、湯タンポを抱えて、火の気のない荻窪駅の待合室で、夜明かしをしたことも忘れられない。

次男が生まれたあと、わたしたちは中通りの小さな借家でも暮らすことになった。中島飛行機の近くであるため、頭上を通るB29の爆音に、日夜脅かされた。ある時は、機銃掃射の弾丸が屋根瓦を貫いて、寝室の畳に突きささるという怖い目があった。こうして家族は長野県湯田中にいた弟を頼って、二度目の疎開をすることになった。

このころわたしの弟は結核を患って、清瀬の病院で療養していた。爆撃のなさそうな日を見計らっては、よく自転車で見舞いに行ったものである。バスや電車を利用すれば、爆撃にあうと、帰宅できないことを恐れたからである。道路の両側には、あちこちで、直径二〇メートルもある爆弾の落ちた跡を見かけた。その弟もついに死んで、火葬をしなくてはならなくなった。多摩の火葬場へ運ばれたが、近づくとも異様な臭いが鼻をつく。到着して初めて判ったことは、爆撃や病気で亡くなった人たちの棺が、未処理のままうず高く積んであったからである。油が乏しくて処理できないとのことであつた。

話は変わって、そのころわたしは広尾病院に隣接する、都の防疫所に勤めていた。Mという親切な上司が、わたしの立場に同情して、わたしも疎開できるように取り計らって下さった。都庁で調べたところ、玉川国民学校の最後の疎開学童が、近々長野方面へ行くとのことだ。しかも、その行き先

は湯田中に近い小布施であることまで分かった。その疎開先で教師をやってはどうことだ。善は急げと手続きに大^{おお}童^{わらわ}だったが、出発の日が近づいても辞令が出ない。M氏が後は何とかするから、出発の仕度をしなさいと言われる。ある日、学校から通知があり、明朝学童たちの荷物を送り出すから、今夜中にあなたも荷物を学校まで届けるようにとのことだ。しかし、今のようにより便利な運送手段が当時はなかった。仕方なく、残る家財はみな廃棄して、必要最小限の物を、自分の手で玉川の学校まで運ぶことになった。

仕事が終わってから、防疫所の自転車とリヤカーを借りて、渋谷の広尾から杉並の我が家まで帰ってきた。リヤカーに積めるだけ積んでみたが、その重いことといったらお話にならない。こうして夜道を、世田谷の学校まで運ぶことにした。夜も更けて、あたりは灯火管制下で真暗だ。ところが目的地も間近というところで、思わぬ難関に出くわしてしまった。急勾配の坂を登らなくてはならないのだ。あたりは屋敷町ではあるし、既に寝静まっており、猫の子一匹通っていない。途方に暮れていたとき、後方から女の声が聞こえた。このご婦人が、「坂の上まで押してあげましょう」と言われる。神の助けと思った。

夜明前、無事に学校へ辿り着き荷をおろした。それから広尾の防疫所にリヤカーを返し、ヘトヘトになって家路についた。その時辿った全行程は四五キロ位もあつたらうか。栄養不足のわたしに、よくもあんなことができたものだと、今でも不思議に思うことがある。

戦争を体験して

母と八人の子供たち

●和田二丁目

倉田 陽子

(昭和七年生まれ)

平和で静かな和田の町に住む高齢の母。母の姿には、戦争のかげりが、今なお消えない。

軍人恩給の支給を受けると一滴の涙を流す。苦難に満ちた戦時中を想い出す母の姿、命ある限り忘れられない強烈な戦争のきびしい想い出、明治、大正、昭和、平成と生き抜く老いた母は、和田に根をおろし六〇年、和田を愛しながら日々を過ごして行く姿、生涯、和田の地を離れる事は、ないであろう。

父は、三八歳の時、八人の子供を残して出征。父の心境は、想像以上のものが存在していたであろう。女学校一年の私、和田小六年、五年、四年、三年、二年と就学前の妹、第二人日の丸の旗を手に別れた父の後姿を今も忘れない。父は、涙一つ見せずプラットホームに堂々と静かに消えていった。新宿駅東口の改札口に父の姿を求めて立去る事を忘れて動こうとしなかった八人の子供たち。この日から家族九人の置かれた現実、決して甘いものではなかった。公務員の留守宅には、生命を維持する最低の給料が支給された。経済的理由(貧

困)で私たち妹弟は、学童疎開にも参加出来ず、空襲を受けながら不安な日々を過ごしていた。今日も生きているという実感、唯一の希望は、命の尊さを確認する事が、明るい幸福であった。二三歳の私は、父不在の不安と母を支える責任感、長女としての役割が、小さな体に重くのしかかった。

杉並区役所にミルクの配給を受けに出向いた母は、八人の子供の命の尊さを職員に説得され、積極的な受入れ先もなく重い足どりで父の養家御殿場の地に疎開した。和田が、戦災に遭う三日前のことである。役所の職員の一言がなければ私たち八人の妹弟は、この世に存在しなかったかも知れない。

父は、横須賀海兵団に入隊、田浦の水雷学校勤務。その後、南方に行く命令を受け、母は、無事任地につくまでと朝の三時、こおるような寒さの中、破れた風呂場で水ごりをし、祈っていたのを幼い私は、この目でじっと見ていた。父は、八人の子供を残し、外地勤務になるようなことになったら日本の将来も不安だと話していた。当時は、憲兵の目があり、非国民としての発言は、一切許されなかった。

疎開先での住まいは、八畳の馬小屋で、ワラを敷きその上にムシロの生活が始まった。ポロ布団三組が我が家の全財産。妹弟は、抱きあって風雨をしのいだ。実に悲惨な疎開であった。母は、子供の転校手続きに遠方を走り廻り、私は、現在の富士サーキットの所在地大御神より御殿場の旧制女学校まで往復四里の学内では、ただ一人の遠距離通学生となった。貧しさのあまり入寮も出来ずに、もくもくと五年間、高校卒業まで下駄もなく、はだし同然で通学する貧乏高校生であった。戦中は、農作業の動員、なれない鍬をふるう毎日。県立学校の月謝が、七円五〇銭、月謝分が役場から支給された。春は、レンゲ畑で寝ころび大空を見上げ、父の無事を祈った。あの日。夏は、富士からの湧水で喉をうるおした峠。秋は、空腹のあまり桑の実を食べ口の廻りを真黒にして帰った日々。冬は、厳しかった富士おろしの冷たい風を受け通学路で消えたチョウチンの明かり。ひたすら歩み続けた四里の通学路、学問への情熱、この五年間の歩みが、私の人生を支えていると確信している。この道標が、強烈な人間性を築きあげてくれた。傘もなくずぶぬれで歩いた山道、貧乏疎開の子供とイジメ笑われたが、母の子育てへの情熱的姿、父を誇りに思い八人の妹弟は、歯を食いしばり懸命に耐え抜いた努力の日々であった。

苦難の一八歳の春が、おとずれた。夏物のセーラー服を黒く染め冬に着用、卒業式には、ポロポロで出席出来なかった。晴れの卒業式の日、富士の雪どけの音を聞きながら涙を流し

て耐えた。現在も「忍耐一八歳の春」を体全身で受け止めている。私が世を去る時は、新しいセーラー服をそっとかけて欲しい。戦争の苦しみを忘れ「花の一八歳」「夢の一八歳」で人生を終わりたいと願っている。

昭和二五年、やっとの思いでふるさと和田の地にもどれた。当時は、戦争の爪跡もなまましい和田だった。念願の大学入学。男女共学の初期、女性専用トイレもなかった。ラーメン四〇円、クリームアンミツ六〇円が無く神保町の古本屋で時間をつぶしたのが、昨日のように思える。

父は、復員後、マラリア熱に悩まされ昭和六〇年、七九歳で静かに他界した。

高齢の母には、少しでも戦争のかげりを忘れ、母自身、生きて良かったと思える人生にと日々援助している。八人の子供を落ちこぼさず健康に育てた父母を胸を張って誇りに思う。

母も私も和田の地をこよなく愛し、ロマンを感じ生涯を終わることであろう。

戦争の苦しみも悲しみも風化した静かで平和な和田の町は、今日もいきびいている。

人生の「こま

●堀ノ内三丁目

小長谷 君代

(昭和五年生まれ)

太平洋戦争は昭和一六年一二月八日未明に開戦された。テレビなど無い時代であったので早暁のラジオニュースのハワイ真珠湾攻撃で大戦果を収めたとの勇ましい報道によって、戦争が始まったのだなあと感じた。

開戦後のしばらくの間は大勝利のニュースばかりでしたが、翌年四月一八日京浜地区から東京にかけて米機の初空襲があり、当時和田国民学校に在学していましたが、空襲があるということで急いで全員早退させられました。その帰り道、建物すれすれの低空を米機が一機だけ頭上を全速力で東方に去っていったのが今でもまぶたに浮かびます。この時品川の国民学校の児童が機銃掃射を受けて一人死亡したと、ラジオがその非人道的攻撃を非難して繰り返し報道しておりました。

昭和一八年四月、高等女学校に入学しましたが、物資が極端に不足し、教科書が手に入りませんでした。また、食料品も主食は配給制で自由に買えませんし、野菜を買うにも三時間行列をして買ったほどです。

昭和一九年、戦局が厳しくなり、私たちは方南町にあった軍需工場に学徒動員として駆りだされ、双眼鏡を作るお手伝いをしました。昼食には人参や醤油の入った混ごはんが主でしたが、食べ物のない時でしたからとてもおいしく有難かったです。

軍需工場での仕事に慣れたころ、空襲警報がなつて間もなくB29が鈍い音をたてて一機飛来して来ました。付近から発射される高射砲の弾が飛行機まで達しないので、友軍機が弾がわりに体当たりをして、飛行士さんがパラシュートで脱出しました。

その日人々の口伝えによれば、その人は母校出身の飛行士さんだったそうです。

家の近くにある日立製作所の寮からは、日毎に寮生さんが出征されるのか、賑やかなデカンショの歌声が夕げ時になると聞こえて来ました。

忘れもしません、昭和二〇年五月二五日、空襲警報がなりましたので外に出てみると、中野方面から大勢の人たちが済

美山にある防空壕に避難して行くところでした。

しばらくして、いつも上空を小編隊で通り過ぎるのに今夜は違った。低空で、飛行機というよりは二十数羽のカラスが一団となって、翼を広げ、月を遮り真暗闇の中を襲撃してくるようで、一瞬銃撃されるのではないかと不吉な予感がしました。「家の防空壕は危険だから松の木に身を寄せて」と父の声、その時上空から数十センチほどの円筒の焼夷弾が数珠つなぎになって、雨の降るようにザーと音をたててはすに流れて降って来ました。それは凄惨な物量でした。

水道の無いところでしたから、井戸のツルベや井戸ポンプで水を汲みあげて火を消そうとしても、人は避難していませんし、風と火の勢いはだんだん強くなって風上の松林の南側の家が次々に火に包まれ、西側の木造の二階家にも火が移った。母は「逃げよう」と言ったので、コートを着て父にラジオをはずしてもらい、風呂敷に包んで父を残して蚕糸試験場のある青梅街道に逃げました。青梅街道は北側一〇〇メートル、家を強制取り壊して道幅は広がったが、リヤカーや大八車に家財道具を高々と積んで避難して来た人たちで一杯でした。

朝、家に帰って見ると、家は焼野原となっていてみるかげも有りませんでした。お釜の分厚い蓋は灰となり、へつついのお米は炊けていた。一人残った父は、鶏を付近の松林に移して助けていた。また、話によると、防空壕に火が入ったので、眉毛を焦がしながら水をかけ、土をかぶして火を消して

一晚中頑張ったようです。お隣りのAちゃんは、お母さんにおんぶされ済美山に避難して行く途中、焼夷弾の直撃を受けて亡くなりました。父親が出征して留守で何の手だても出来ませんでしたので、みんなで焼けぼっくいを集めて来て霊を弔いました。

壕生活をしている時、日立のBさんから「寮生がいないのでお風呂をどうぞ」と親切に誘って下さいましたので、同じ壕生活をしている近くのCさんを誘って、Bさんたちと御一緒に星空を眺めながらプールのような大きなお風呂に入りました。空襲もなくのんびりとした一夜でした。

掘立小屋を建てて一か月過ぎたころ、近くに住むDさんの御紹介で信州に疎開しました。のんびりした町でしたが、ここにも米機が飛来し、爆撃と機銃掃射がありました。このような事があってから幾日もたたない日に終戦となりました。

しばらくの疎開生活から別れをつけて杉並に舞い戻りました。あの松林や、いろいろの植木も枯れていた。なぜか妙法寺の入夜の鐘が、口では言い表せない程懐しく感じました。

私の戦争体験

●西荻北一丁目

小松澤 慎二

(明治四三年生まれ)

私は昭和九年四月から終戦まで一〇年間、宿町の中島飛行機(現日産自動車株)の風洞部に勤務し、飛行機の試作に必要な航空力学分野の風洞実験研究をつづけていた。ただ一時期現役で入隊した経験はある。当時政府は、軍需工場における青年技術者の技能向上のため、その工場から一、二名の技術者を選抜し、駒場の航研で東大教授による航空学の専門知識を修得せしめるため、講座を開講することになり、昭和一二年この東京工場からは、Fと私が選抜され受講することになった事例がある。

昭和一六年の暮の戦争開戦当日には、午前本館前の幅五〇メートル、長さ一五〇メートルのアスファルト道路に三万人以上の全従業員が集められ、宣戦の詔勅をラジオ放送できき、心身共に引締まる思いがしたことを思い出す。開戦当初は陸海軍とも各方面で予想を上回る快進撃をつづけ、我々も旺盛な気分で実験をし、日ごとに高能率を上げることが出来た。夜間一〇時過ぎまで残業して退社しても、ことさら疲労をも感じなかった程である。

仕事を試作機の揚力、空気抵抗とか、横風をうけた場合、あるいは縦揺れの度合などを、模型飛行機を通じて測定し、計数的に算定する重要な作業でしたので、その結果が試作機設計の仕様書に適合するか否か苦心が払われ、適当な改修が加えられて実験が続けられたのはもちろんである。最初のころは空襲もなく、戦線も景気よくて、シンガポール陥落のときなど、また、英艦プリンス・オブ・ウェールズ号の撃沈の報などをきき、近くの井草八幡宮まで夕方から提灯行列をつづけたこともあった。

昭和一八年後半ごろから戦争の様相が一変し、戦禍が内地にまで拡がり、経験したこともない空襲の脅威にさらされた。しかもその脅威は昼夜を別かたず、焼夷弾攻撃が続いて、ご承知のように全国的に焦土化が進んでいった。殊に軍需工場は目の敵にされたのは当然である。私も当時風洞部防護団長などをやらされたので、空襲のたびに初めのころは会社に出動したこともあったので、家においても脚絆きんぱんを巻いて寝ることも多かった。

昭和一八年には我が家も想像も出来ない大きな事件に遭遇した。ただ結果的には九死に一生を得た感じに終わったが、その事件の顛末は次のようなものであった。

昭和一八年七月には我が家にも三番目の子供（長男）が生まれ、妻も喜んで石岡市の実家の両親に、男子の初孫の顔を見せに行くことになった。余り寒くならない一〇月末ごろ妻は長男を背負い、二人の娘（長女(5)・次女(3)）の手を引いて、手土産をもって午後三時ごろ西荻窪の家を出て、午後四時過ぎには上野駅を発った。上野駅では常磐線口が高い階段だったので、子供連れの身では大変で、階段を上り切って直ぐ常磐線の列車に乗り込んだ。その位置は前から数えて六〜七輛後方になっていた。一般の人は我れ先にと駆け足で前方の車輛に乗るため走り去って行くのが目について、妻は前方車輛に行くのは時間的にも無理だったので諦めたわけである。人の命は極めて大事であるが、この乗車位置がいかに人生の運命を変えるのか神のみぞ知るといふもので、この位置でこそ私の家族は幸にも最悪の災禍を免れることができ、大きな神の恩寵を感じたのである。この列車は土浦駅まであと二〇〇メートルの所で大事故に巻き込まれた。実は駅構内で貨物と客車が正面衝突していて、そこに私の家族が乗った列車が、夕闇の中とはいえ、突っ込んで三重衝突となり、一、二等の特別車輛には、霞浦海軍航空隊の将校たちが多数乗車していたが、これが前から三〜四輛だったため、衝突した瞬間に桜川の真中に墜落し、一般客を含め、海軍軍人も多数水没し、

惨死をとげた。地上での死傷者を入れると二〇〇名を超す被害者が出た。私の家族の乗った車輛は、間一髪、堤防の線路上に切り離され、水中に落下せずに取り残された。

車内灯は消えたものの隣席に乗り合せた大学生が二人の娘を車外に降ろしてくれ、手を引いて駅前に行くことができた。そこには蕙むしろの上に並べられた多数の事故死者の姿があった。負傷者救援対策も、突発事故のため思うように抄はかどらず、その上手足を車輛に挟まれ救助を求める声、警官や消防団員のどなる声などが充満して、正に阿鼻叫喚の情景が現出した。上野駅でワラワラと前方に走った人たちは思わぬ災難に遭ったわけである。その後家内と子供たちは消防団員に誘導されて駅前の旅館に仮泊したが、このままでは実家に行けない。あと二駅で着くというのに。行くと却って、夕方の子供連れの旅の不注意がとがめられるからで、翌日その旅館から直ぐ帰京してしまったという事件があった。

しかし昭和二〇年ごろになると東京は連日の空襲で、石岡の実家に家族は疎開したが、近くにアルコール工場があったのでこも機銃掃射があり、空襲もはげしくなったので、こも一か月位で最後は私の生家の阿見町（茨城県稲敷郡）の方に終戦まで疎開した。田舎でも当時は食物は十分でなく、供出のため思うように手に入らず、物々交換でやっと米を手して、子供たちに食べさせたが、井戸水の加減か、食物のせいかわからないが暫く長男は下痢がつづき、医院も近くになく妻も難儀した。それに蚊や蚤の襲来で、子供たちも無経

験なためさんざん悩まされた。長女も一年生になったばかりだったが、毎日四キロの道を田舎の小学校まで真赤な顔で通学したそうだ。

西萩の自宅では私一人の生活だったが、ある雪の降る夜の二時ごろ庭の真中に掘り築いた防空壕に泥棒が入った足跡が点々とあり、壕中の奥に格納していた比較的高価な瀬戸物を全部持ち去られたことがあった。自宅の近くには五〇〇キロ爆弾が落ちて死傷者が出たが自宅には被害がなかった。しかし昭和一九年春ごろから二〇年にかけて東京工場目掛けて照明弾をかけられ、漆黒な夜でも真昼のような明るさとなるので、そこへの爆弾投下ですから、近くの武蔵野工場も被害をうけ、空襲効果は上り放しという痛ましい光景となった。風洞部実験室も低空の艦載機の来襲をうけ、コンクリート柱に三、四センチめり込んで機銃弾が止っていた。この一発でも当たったら即死する所であった。当時は空襲警報が長く続くので防空頭巾は被り通しであったので、実験研究は出来る状況でなかった。

昭和二〇年三、四月ごろには連続の空襲警報なので、とうとう会社の敷地内にはいられなくなり、社命で裏の観泉寺の森か上井草運動場まで避難する状態となった。この空襲では、仕事らしい仕事は出来なかっただけでなく、当時はいつなんどき爆弾にやられて死ぬのかと思いつつ毎日を通していたので気の安まることもなく、精神的打撃は大きく増すばかり、いつも恐怖に苛さいなまれていた。このころ下町方面は焦土と化し

たが、自宅の被害が無かったのは私にとって救いであった。ただ一人身での会社勤務のため配給で並ぶこともできず、毎日の食事が思うようにできず、野菜不足で苦勞し情けない程惨めな日々がつづいた。

八月一五日の正午、四年前に並んだ本社前の道路に坐り、終戦の詔勅をきいたときは、自然に涙が出て、無念さは残るものの、これでホッとしたことと、これで爆弾はもう落ちてこないのだ、電灯も明々となつてくれるのだと思うと、平和の尊さがいかに偉大であるか判かった。平和の有難さをこんなに実感したことはない。連日の苦痛だったあの思いは、子供たちには味わわせたくないと心から思う。

官報

號外

昭和十六年十二月八日

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ
昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力
ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕
カ眾庶ハ各、其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケ
テ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑、東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ不
顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ
拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ
樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ

今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト對端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ
得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國
ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ擾亂シ遂ニ
帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ

幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相
提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ

特ミテ兄弟尙未タ牆ニ相闕クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政
權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東
洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊
ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商
ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存
ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事應ヲ平和ノ裡ニ
回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓
ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ
益、經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメム
トス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積
年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セ
リ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一
切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ
祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和
ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

官報第... 昭和十六年十二月八日 月曜日

宣戰布告の詔書 (昭和16年12月8日付官報号外)